

## 過労死ゼロ読書感想文①

### 「過労死ゼロの社会を」を読んで

本書は、24歳という若さで生涯を閉じた高橋まつりさんの過労死自殺について、決してこのようなことが繰り返されてはならないとの思いと、まつりさんの母とその代理人を務めている弁護士川人博氏がさまざまな場で発言してきたことをまとめ、さらに、まとめる中で気がついたこと、ぜひ社会に向かって訴えたいことを付け加えて、1冊の本にしたものである。また、まつりさんを偲び、生前の彼女の写真を多く掲載されている。

その中で、過労死ゼロに向けて弁護士の川人氏が提言していることがある。多くある中のうちの2つが印象に残った。

1つめに、「適正な業務量調整と適正な人員配置」である。それは、過労死とりわけ繁忙な部門において過労死が起きていることを例にあげ、そのような部門には適正な人員を配置すべきであるというのが氏の主張であった。確かに、私の職場でも繁忙期に人が足りず、目を回しそうなほど忙しい時期がある。しかし、まつりさんのような睡眠時間が二時間ほどしかないような生活までには陥ったことがない。むしろ、そのような事態になる前に、適正な人員を配置すべきなのではないかと思う。人員を削ることでコストを削減するという企業側の目論見もあるのだろうが、そのような経済的利益よりも、人命を優先すべきなのが本来の正しい社会の姿なのではないかと思う。人命か利益か、どちらも最大限に保障される社会を作っていくことが、これからの社会の課題ではないかと感じた。

2つ目に、新入社員を疲弊させる、宴会、懇親会を廃止か抜本的改革をすべきだと述べられている。日本社会にいつのまにか根付いてしまった、飲み会、飲みにケーションともよばれる文化だが、果たして本当に必要なのだろうかと私自身も思う。そのような場をわざわざ設けるよりも、個人的にじっくりと話を聞いたり相談したりしてもらえる場所や時間を作る方がメリットは大きいのではないかと思う。それだけでなく、行きたくもない飲み会に半強制的に行かなければならない雰囲気も打破される必要があると感じる。ただ、最近では私自身の周りでも、そのような会に半強制的に参加させようという風土は少しずつ薄まりつつあるように感じる。

ともあれ、例にあげた以上の二つの改革点は、いつのまにか社会に根づいてしまった文化でもあると感じる。しかし、その文化が長く続いているからといって、常にそれが「良い文化」であるとは限らない。その点を今後も念頭に置いて暮らしていきたいなと強く思わせてくれた本書であった。